

松本の城下町では、城郭や武家の屋敷地の発掘調査とともに、町人の店や住まいであった地域の発掘も進められ、当時の生活の一端が明らかになりつつあります。町人地の発掘では現在までに伊勢町で28地点、本町で7地点、博労町で3地点、飯田町で1地点、小池町で2地点、宮村町で2地点、中町で3地点、東町で3地点、和泉町で1地点、下横田町で1地点が発掘されています。

## 1 伊勢町での発掘

伊勢町での発掘はその数も多く、近世を通しての様子が概観できるようです。竹内靖長さんの研究成果をもとにしてその様子をみましょう(「松本城下町における成立過程の様相—建物遺構の変遷を中心として—『信濃』52巻第10号」)。

### (1) 建物の変化—しだいに短冊形の地割りに—

城下町初期の16世紀後半から17世紀前半にかけては、地面に掘った穴に柱を直接立てたり、穴の底に平石をおいて柱を立てたりする掘立柱<sup>ほったてばしら</sup>の建物が主流でした。

17世紀中ごろから18世紀前半になると、掘立柱建物は消滅し布堀礎石<sup>ぬのぼり</sup>建物が出てきます。布堀礎石というのは、平面に溝をほりその溝に石を敷き詰め、その上に平石をおいて礎石にしたものです。これは蔵の建築に多く使われ、母屋は普通の礎石の上に柱をおいたようです。

18世紀前半から19世紀にかけては、礎石建物と布堀礎石建物の両方があり、布堀基礎が母屋<sup>おもや</sup>にも使われるようになっていきました。軟弱な地盤をより強固にするために、溝の底に杭を打ち丸太を寝かせその上に石をつめて礎石になる平石を置く工法もみられるようになります。

敷地内の建物の構成をみると、16世紀末から17世紀の初めごろは、建物は集中して建てられてはいないで、空いているところもあったようです。城下町に人々が集まって住むという状態にまだなっていなかった様子がうかがわれます。ところが1620年代になると様子が大きく変わり、間口3間から6間で奥行きが20間から25間の短冊形<sup>たんざく</sup>の地割が定着してきたようです。よく目にする家並みが続く街中の様子になってきたわけです。

17世紀後半になると、街道に面したところに母屋を建て、その奥の敷地中央部につぼ庭やごみ用の穴を設け、さらに奥まったところに土蔵を建てるといのように、敷地内の利用法がかわってきます。とくに土蔵はこの時期から出現し、18世紀後半以降急激に普及したといえます。前面に母屋、奥に蔵という建物構成の形態が幕末まで続きます。

### (2) 人々が使ったもの

人々が使っていたものもいろいろ出土しています。志野や織部<sup>おりべ</sup>や瀬戸や肥前といった陶磁器や、漆<sup>うるし</sup>椀<sup>わん</sup>やくしや下駄や人形といった木製品、キセルの首や口、銭やかんざしといった金属製品、灯明皿やなべなど。あて先である他領の町や人名や、品名や数量を記した木製の荷札、鍛冶屋が使った炉の跡など商売や仕事の道具も出土しています。



左：松本市立博物館の展示  
右：木製の荷札（発掘調査報告書より）

## 2 本町での発掘

本町二丁目での発掘では、大量の砥石<sup>といし</sup>が出土して注目を集めました。砥石問屋が在ったのではないかと考えられています。また、上水道の敷設の様子が見える遺構も出土しています。

砥石は、二つの穴の中に多量に埋められた形で見つかりました。砥石の大きいものは約16cm台×5cm台×3cm台、小さいものは約13～14cm台×4cm台×2cm台で、その数は4,859点でした。使用されたものではないようで、大部分に火がかかった跡が見られました。産地は群馬県の南牧村で、砥沢<sup>とぎわ</sup>石とよばれるものであることもわかりました。松本の間屋が仕入れた上州の砥石は、さらに他所へ販売される矢先に火事にあって、廃棄<sup>もくひちくかん</sup>されてしまったのでしょうか。

上水道の施設として、木樋<sup>もくひ</sup>と竹管<sup>ちくかん</sup>と継ぎ手や埋設桶が出土しています。これら上水道の施設については、このシリーズ31回目に掲載するので、ここでは紹介にとどめます。（「松本城下町跡 本町第3・4次」『松本市文化財調査報告NO132』）



右：焼けたあとがある大量の砥石  
（調査報告書より）

左：砥石の間屋と思われる町屋があった場所  
（中央2丁目2番）

## 3 東町での発掘



東町の発掘地点の現在（城東2丁目3番）



発掘された竈（調査報告書より）

東部地区コミュニティー防災広場がつくられる場所が発掘対象になりました。この場所は、1697（元禄10）年頃の史料に間口5間の麴<sup>こうじや</sup>屋があったとされている場所でした。麴屋であったことを裏づけるように、麴を造るときにつかたとみられる麴竈<sup>かまど</sup>の跡が見つかりました。直径が2m40cmの円形と2m60cm×2mの方形の部分が組み合わさっている石組の竈で、火が使われたあとが残っていました。その

竈の中には皿や漆器の椀などが入り上部は破壊されて見つかりました。いずれかの時期に使わなくなり埋められたものでしょう。

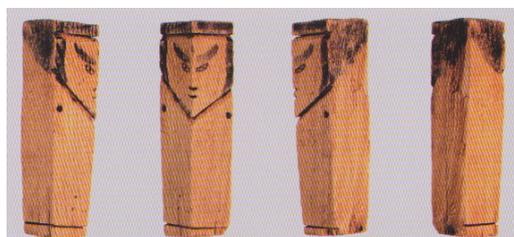
このような当時の生活に関係した物が発掘されたと同時に、城下町の形成を考える上で貴重な遺構の発見もありました。現在の町並みは東西に区割りされていますが、16世紀末から17世紀前半には南北に区割りされていたことを示す遺構がでてきました。それは17世紀中ごろ以降、現在の形と同じ東西の区分けに変わっていきます。このことは、以前にあった町並みを変えて城下町としての東町をつくっていったことを示していると発掘担当者は考えています。（「松本城下町跡 東町第3次発掘調査報告書」『松本市文化財調査報告 NO185』）

#### 4 飯田町での発掘

藤森病院の建替えにともなう発掘では、高さ8.5cm、幅2.9cmの角柱状の木に、人間の顔が描かれ、肩の位置にうでとなる木を差し込んだと思われる小穴があいたものが発見されました。これは七夕人形の胴体部と思われ、同時に出土した遺物から18世紀後半から19世紀初頭のものとして見られています。松本の町内から始めて発見された江戸時代後半の七夕人形ということになります。（「松本城下町跡 飯田町第1次発掘調査報告書」『松本市文化財調査報告 NO202』）



飯田町の発掘地点の現在（中央2丁目9番）



初めて発掘された七夕人形の4面図  
（調査報告書より）

なお、城下町跡の発掘で出土した遺物の一部は武家地での出土品も含めて、松本市立博物館の1階に展示されています。実物をご覧になりたい方におすすめです。

#### 5 招き造りの家

松本の町は何度も火災にあったため、武家屋敷はもちろんですが、商家も江戸時代の古い建物は残っていません。しかし、東町や安原町を歩くと、当時の商家の建築様式といわれる「招き造り」の建物を今もみることができます。

切妻の屋根を前後均等の長さにしないで道に面した表側を短くして奥の部分を長くした家の造りを「招き造り」といいます。そうすると道に面した側の屋根が前面から見えにくくなって間口側の正面部分を高く広くみせることができます。また、奥に長い敷地を生かした建物をたてることができます。



安原町にある招き造りの家

城下町の町人地を歩くときに、屋根の形に注目するのもおもしろいことです。